

長期入院者のターミナルにおける ニードを満たす援助

札幌太田病院 1 階病棟

高橋美津江¹⁾

1) 看護師

1. はじめに

多くの病院における末期患者は、いまだ治療や延命のための処置が優先されている場合が多く、ニードを優先した援助が充分行われているとはいえない。

今回、関わった A 氏は大腸癌末期の為、食欲不振、嘔気・嘔吐、全身倦怠感などの苦痛を抱える中で、食べることに對してニードを伝えることが多かった。そのため看護師は A 氏のニードを満たす援助を展開し、関わっていった。A 氏は言葉が正しく発音できず自分の思いが伝わらず苛立つ事も多かったが、意思を伝えることをあきらめなかった。そして伝わった時は、とても愛嬌のある笑顔で喜びを表していた。

本研究では、末期患者へのニードを満たすよう関わった援助が、苦痛緩和やその人らしく最期を迎えることにつながっていると知ることができたので、ここに報告する。

2. 研究目的

末期患者の基本的ニードを満たす視点で関わった援助にはどのような効果があったのかを理解する。

3. 研究方法

事例研究

4. 研究期間

年 1 月～ 年 8 月

5. 事例紹介

- ・患者：A 氏、50 歳代後半、男性、未婚
- ・診断名：統合失調症、大腸癌
- ・現病歴：昭和 40 年代から統合失調症にて当院入院治療中。前年、下行結腸癌の手術のため B 病院へ転院。左半結腸切除手術施行する。本人には半年の命と告知したが理解できず、キーパーソンである兄に説明、今迄と同じ治療を希望された。そのため再入院後は以前より看護スタッフ、環境共に慣れている 1 階病棟にもどり経過を見守ることになった。

6. 看護の実際

A 氏は、食べるのが好きだった。どちらかというとならぬ入院生活の中、唯一の楽しみであり、喜びでもあった。小遣いの大部分も食べることに費やしていた。反面、好き嫌いが多く、病院食は好きなもの以外は、あまり好んで食べなかった。嗜好を満たすため、病院の売店で好きなものを買って食べることもや、外出し、好きなものを買って帰ることもあった。

しかし、症状が進むにつれ、倦怠感も強くなり、徐々に車椅子を使用するようになった。癌の進行により体力が衰え、自床で過ごす日も多くなっていった。その中で、病院食はほとんど摂れないこともあったが、本人の好むものは少しの量でも摂ることはできていた。看護師は無理に食事を勧めず、食べたいもの

を食べたい時に促すよう関わった。食べる量も看護者が決めず本人の満腹感に合わせた。

体調の良い時はナースコールで「スイカ、スイカ」と好きな果物を希望された。看護者と共にデイルームに行き、冷蔵庫からスイカを出してもらい、「うまい、うまい」とA氏特有の愛嬌のある笑顔で本当においしそうに食べていた。スイカ、プラムなどの果物、水羊かんなど体調に合わせ、一日に二回は少量であるが食べることができていた。嘔気があり経口で摂ることは厳しい状態の中、食べるというニードは最後まで続き、また食べることができた。

兄夫婦の面会の際には、果物や水羊かんなど持参したものを大好きな家族に囲まれ、「おいしいなあ」と笑顔をみせて食べ、それは食べることに同時に団欒の場にもなっていた。

死の前日、「食べたい」という本人の希望があり、看護者に見守られつつパンを一個食べた。その間、看護スタッフと共に、入院生活の様々な思い出を振り返り、会話をし、お互いにとって良い時間を過ごせた。

翌日、血圧が低下し、呼吸状態も悪化し永眠された。

7. 考察

ニードとは誰しもが持っているものであり、健康なときにはそのニードを自分で満たすことができる。しかし、徐々に食欲不振、嘔気・嘔吐、全身倦怠感などの身体的苦痛が出現し、自分の思うように体を動かすことが困難となり、自分でニードを満たすことができなくなった。そのため、看護者は、患者の基本的ニードを満たし、生活行動を行うことを援助した。

ヘンダーソンは看護独自の機能を以下のように述べている。『看護婦の独自の機能は病人であれ、健康人であれ、各人が健康あるいは健康の快復（あるいは平和な死）の一助とな

る生活行動を行うよう援助することである。その人が必要なだけの体力と意思力と知識とを持っていれば、これらの生活行動は他者の援助を得なくても可能であろう。この援助は、その人ができるだけ早く自立できるように仕向けるやり方で行う』¹⁾このような考え方を基本として看護援助を展開した。その結果、身体的・精神的苦痛の緩和に役立ったと考えられる。

A氏には食欲低下、嘔気・嘔吐の症状があり、腹部の疼痛でモルヒネ座薬を使用することも時にはあった。しかし、そのような状況の中でも好きなものは食べたいという意欲は失っていなかった。季羽は『「できないこと」を問題視するのではなく、その状態の中で、どうすれば患者の満足感を高められるか（中略）患者ができることを見つけることで、QOLを高めるようにするという考え方を援助の視点とする』²⁾と述べている。看護者が食べるよう促したり、励ましたりするのではなく、A氏自身の意思を尊重し食べたいものを食べたい時に、食べやすいよう援助することで、「うまい、うまい」と、少しずつであるが摂取できていた。嘔気などの身体症状がある中での「食べることができた」という思いは、苦痛を軽減することにつながった。

死にゆく患者への援助について最も大切なことは、その患者が最期までその人らしく生き、その人らしく死んでいけるよう援助していくことである。A氏のニードを満たすよう援助したことは、A氏にとって身体的・精神的苦痛の緩和につながった。そして、同時にA氏らしい最期を迎える援助になったのではないかと考えられる。

8. おわりに

基本的ニードを満たす視点で援助を展開するという事は苦痛緩和につながり、その人らしい日常性を維持し、その人らしい最期を迎えることに大変有効であることを知ること

ができた。

末期患者がどんなニードを抱えているか、本人や家族の話を傾聴し、患者自身のやり方を尊重しつつ、看護者が今できることは何なのか、考え援助していくことが看護者の役割だと考える。また、末期患者のあるがままの状態を受け入れ、その中で可能性を見つけ生活の質を高めることが大切であることに気づいた。

当病棟においても、長期入院患者や高齢の患者が多く、看護の必要性を感じにくいと思われがちだが、看護者が患者のニードを感じ取る感性を磨き、何もできないのではなく、何ができるかという視点で自分のすぐ間近にいる患者に目を注いでいくことが必要であることを学んだ。

文 献

- 1) ヴァージニア・ヘンダーソン(湯槇ます、小玉香津子訳):看護の基本となるもの改訂版．日本看護協会，東京，p32，1976
- 2) 季羽倭文子:ホスピス・緩和ケアにおける看護援助の視点．ターミナルケア，12(10):4，2002
- 3) 内海明美:他人に意思を伝達でき，自分の欲求や気持ちを表現できることへの援助．ターミナルケア，12(10):79，2002
- 4) 城ヶ端初子:やさしい看護理論．メディカ出版，大阪，pp27～38，2004